



Title	金沢モダニズム : 1932年金沢市主催「産業と観光の大博覧会」と『モダン金澤』を例に
Author(s)	小川, 玲美子
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56308">https://doi.org/10.18910/56308</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 金沢モダニズム

— 1932年金沢市主催「産業と観光の大博覧会」と『モダン金澤』を例に —  
小川玲美子／金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所

金沢という街には必ずと言って良いほど「歴史」や「伝統」という言葉が付随する。2015（平成27）年に予定されている北陸新幹線の開通により、観光熱は益々高まり、市は歴史と伝統が息づいている街というイメージを更に推し進めたい。しかし、1930年代に目を向けると、金沢市内ではモダニズムが興隆を迎えていた。「加賀百万石」という藩政期の威光を引きずる傾向が強かった金沢市において、この動きは如何に成長し、またどのような人物達によって支えられていたのだろうか。本研究では、行政と民間側の両者の動向を探ることにより、一地方都市におけるモダニズムがどのように展開されていったのかを検討する。

### 1. 明治期の金沢市

武士の割合が多かった金沢市では、明治期以降、人口の減少や経済困難などの市勢減退が顕著であった。そのような状況からの脱却を目指し、行政は明治前期を通して士族授産、殖産興業などにより、沈下する金沢市を盛り返そうとした。特に美術工芸振興には注目すべき点が多く、ジャポニスムの影響によって海外輸出が好成績を収めていた。しかし一過性の流行に過ぎなかったジャポニスムは当然ながら早々に終焉を迎え、それに伴い美術工芸品の輸出は減少してしまう。

そこで金沢市は第九師団や第四高等中学校など、国の機関を市内に誘致することにより、経済、人口の再興を図った。結果としてこの誘致は成功し、経済効果、インフラ整備などの波及効果に及んだとされる。更には津田米

次郎が開発した力織機による輸出羽二重の生産が大きな収入源となり、金沢市はようやく市力を取り戻すかに見えた。しかしながら時運悪くも、昭和期に突入すると世界恐慌に端を発する全国的な金融恐慌へと陥り、その影響によって金沢市内の繊維産業は大打撃を受けてしまう。そこで金沢市行政が目にしたのは観光産業であった。

### 2. 産業と観光の大博覧会

1932（昭和7）年に開催された「産業と観光の大博覧会」は、観光をメインテーマの一つに据えたという点で象徴的である。これはそれまで観光事業に消極的であった金沢市が上述の恐慌によって繊維業主体の経済構造を見直し、新たに観光に注目した為だとされる。また、観光都市としての再出発を市民に知らせるにあたり、博覧会は絶好の機会であった。金沢市が新たな都市として生まれ変わる意向は、博覧会パビリオンにアール・デコや構成派など、当時流行のデザインが採られていることから汲み取れる。また建築物のみならず、ポスター、絵葉書、あらゆるメディアにモダンデザインが使用されていた。当時の最先端のデザイン、技術、娯楽を一同に集め、一般に提示していた本博覧会は市民の目には浮世離れた空間として映ったに違いない。

そして、この博覧会が地方都市金沢に与えた影響は多大なものであった。会期中の宿泊人数や鉄道の乗降者数の増加はもちろん、博覧会を契機に街では洋式ホテルの建設、モダンガールのバス車掌の登場、街の美観整備がなされるなど、当時並行して行われていた都

市計画に加え、街の近代化が促進された。

しかし博覧会で主張されたのは街の近代化のみではない。出品物としては藩政期来のものが目立っており、市内の遊郭が協力した演芸館がその代表例として挙げられるだろう。博覧会は藩政期からの娯楽である遊郭に目をつけ、観光の目玉としようとしたのだ。史跡や、温泉などの藩政期、つまり封建主義時代の文化や町並みに対して肯定的な姿勢だったことは博覧会の出品物が示している。事実、石川県下の温泉街への博覧会協力の呼び掛けや、協賛として「百萬石文化展」を開催するなど、藩政期の芸術作品の展示をしており、本博覧会では街としての近代化をアピールしつつも、県下、市内の観光資源である前田加賀百万石時代の遺跡や娯楽の宣伝を巧みに行っていた。以上は行政、つまり官側によるモダニズムと言えらるだろう。

### 3. 雑誌『モダン金澤』

一方、博覧会開催と同時期に民間側からも街の近代化を促す動きがあった。その様子は金沢市内の映画館、第二菊水倶楽部の宣伝部に勤めていた鞍信一氏によって創刊された雑誌、『モダン金澤』によく表れている。『モダン金澤』では当時の大衆娯楽の代表であるカフェーや映画について多く言及されており、行政が藩政期からの遺産を利用して街を観光都市として展開しようとしていたのとはほぼ同時期、民間ではカフェーや映画などの新たな娯楽が流行していたようだ。博覧会開催の切欠ともなった金融恐慌はエログロナンセンスの風潮を生み、現代とは異なり性的な要素を多分に含んでいたカフェーや映画を勃興させ、また安価に楽しめるサービスはサラリーマンなどに代表される中間層によって支持された。

金沢においても映画、カフェーは大正期より取り入れられていたが、『モダン金澤』で

は地元資本のものは卑下される傾向にあった。東京日活映画会社の脚本家、飛鳥省太郎が『モダン金澤』の中で「金沢の映画館の外装宣伝はあくどい」と酷評をなしていることから、当時流行の大衆文化を受け入れてはいたものの、中心都市の洗練されたものと比較するとやはりまだ見劣りするものだったらしいことが窺える。その明所として、明治期まで人気を二分していた香林坊付近と尾張街付近は、香林坊への都会カフェーの進出によりその均衡を崩してしまう。

『モダン金澤』内では、街の人々の封建主義時代の遺産や、旧体制のものに対する拒絶反応が強い様子や、都市に憧憬を抱き、文化的規範を求めている言説がしばしば見られる。

しかし上述のように昭和初期の時点ではまだ中央都市のものより劣っていると批判され、地元資本のものは酷評されることが多かった金沢市の大衆文化だが、それまで行政の行ってきた都市開発・整備や「産業と観光の博覧会」のように、上からのモダニズムを一方向的に享受していた姿勢から、民間より新たな文化を作りだそうとしていた姿勢は十分に評価ができるのではないだろうか。その証拠に、『モダン金澤』のような雑誌が金沢のような保守的な街で生まれたことが驚嘆に値すると評されている。また、警察などの行政機関から弾圧されることの多かった市民の娯楽ではあったが、それでも根強く支持されたのは、依然として城下町の性格の抜けきれなかった金沢という街に、ようやく生まれたモダニズムの芽を守ろうとしたモダニスト達の努力の結果だと言えよう。昭和初期における金沢における大衆文化、つまり民間モダニズムは、未だ城下町の雰囲気から脱しきれない中で、「民間から」沈滞する街を自分たちなりのやり方で展開しようとした試みだと捉えられるのではないだろうか。